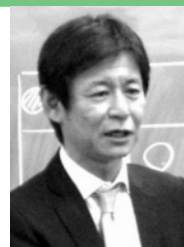


# ALの3つの柱を意識した授業づくりとその波及効果

## PROFILE

### 重枝 一郎 しげえだ いちろう（福岡市立福翔高等学校教頭）

福岡教育大学数学科卒業。福岡市立中学校教諭指導教諭を経て、福岡市教育委員会教育センター主任指導主事。その後福岡市立福翔高等学校教頭5年目。福岡市中学校サッカー選抜チーム監督（平成14、15年度）、アビスパ福岡ジュニアユースチームの「コミュニケーションスキル授業」講師（平成21～24年度）、市民教育賞「班形態を生かした集団づくりの実践」（平成18年度）、生徒指導総合講座（風土会）講師（平成19年～）



### 福岡市立福翔高等学校概要

#### ●創立117年の伝統と実績

本校は明治33年（1900年）に福岡市商業学校として設立されました。これまでに卒業生は約3万5千人を数え、福岡の街を支える政財界人を多数輩出しています。

#### ●総合学科高校のパイオニア

平成12年度、福岡都市圏初の総合学科高校として生まれ変わった本校は、平成年度にコース制を導入した「セカンドステージ」をスタートし、さらなる進化を目指し、進学型の総合

合学科として「サードステージ」を平成25年度よりスタートさせています。

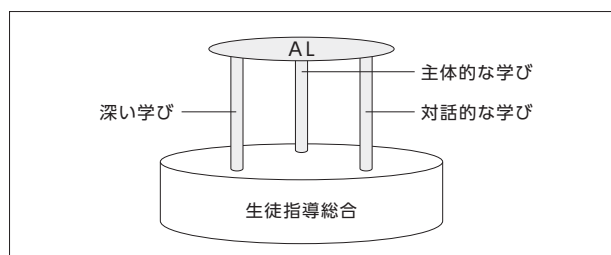
#### ●非常に活発な部活動・生徒会活動

「熱・意気・力」の校訓のもと、ほとんどの部活動が県大会出場をし、中には九州大会、全国大会出場もしており、部活動の加入率も8割を越え、県内でもトップクラスの実績です。また、学校行事の自主的運営など生徒会活動も非常に活発で、校内に生徒の活気が溢れています。

## ① アクティブ・ラーニングとは

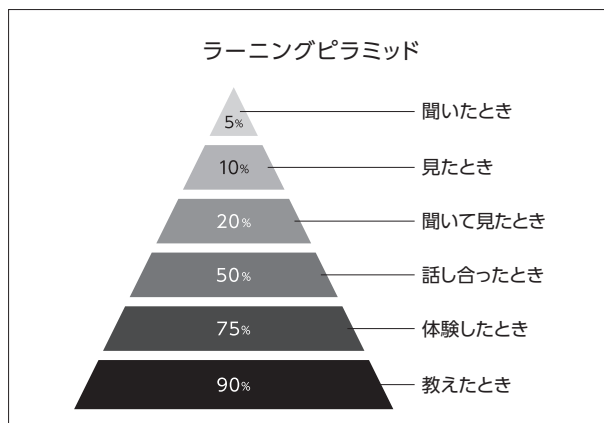
「生徒の能動的な学修を取り込んだ授業を総称する用語」「アクティブ・ラーニング（AL）が示す授業の形態や内容は非常に幅広い（100%講義形式でなければ…）」「知識が使える人材の育成を目指す」「各教科固有の能力というより、教科横断的な能力」等とされています。そして、3つの柱を「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とし、「深い学び」にちゃんと結びついている学習法なのかというのがテーマとなっています。

これからの生徒は「正解のない世界にすみ、自分で考え、自分で判断し、他者と協働して行動する」ための教育を受けることになり、これからの教える者は生徒以上に主体的に協働的に学ぶことが不可欠となっています。



ALの3本柱をテーブルで表しています。テーブルが立つためには3本脚がないとならないのでこの絵にしています。しかしながら当たり前とはいえ、その脚を置く土台がなければ立ちません。この土台がすべての教育活動の基盤となっていきます。この部分は、授業の基礎的条件になり、あらゆる教育活動のすべての場面が相互作用のある場として土台となっていきます。（私はこれを「生徒指導総合」として、その相互作用の大切さが日常の教師の仕事になっていると思っています）

下の図は、いわゆる「ラーニングピラミッド」をわかりやすく示したものです。



以前、生徒指導の困難校に赴任したとき、この「ラーニングピラミッド」を知る前に「学びの記憶」という名称で似たような図で生徒に示したことがあります。その際、実感を伴うことが大切だと思い、板書もしない、ノートもとらせない、ただ私の単調な説明を「聞くだけ授業」という授業をしました。生徒は（私自身も）その時間の教室には「心理的酸素」がない状態に陥り、ただただ苦しい時間を実感しました。次の時間は「見るだけ授業」をしました。これは、板書はするけどノートに書いてはいけないといった「見るだけ」の授業です。このような授業で「どれだけ学びの記憶として残るか」「テストで何点取れるか」等考えさせ、「学びの記憶を上げるためにはどうすることが効果的か」を考えさせたとき、「ノートに書くのは自分の学びの記憶を上げるため」「話し合うと思考が活性化しているし、眠くならないし、友だちへの気持ちも変わる。そして、結果、記憶にも残っていると思う」等の考えが生まれました。今、言われているALも生徒の実感から得ることができる学習法ではないかと思います。

## ② 主体性と相互作用のある学びの場

### 「授業の基礎的条件」が不可欠

授業を実現するための条件は、右図に示すように「基礎的条件」と「内容的条件」の表裏一体型といえます。「基礎的条件」は授業の目標や内容、方法についての考え方や形式にほとんど関係なく、すべての授業に常に要求される条件であり、その条件の適否は学習の雰囲気、学習の規律、そして肯定的な人間関係に支えられています。

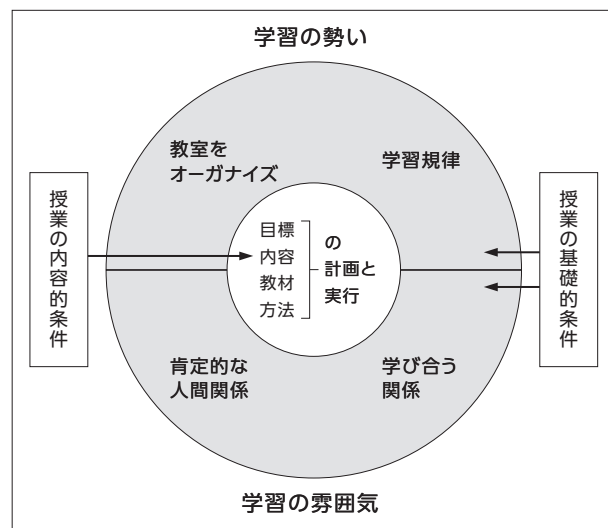
私はこの図をよく小中連携の会議のときに示していました。というのも以前このような会議で小学校の先生は「中学校の先生は授業を丁寧にしていない」それに対して中学校の先生は「生徒指導ができていなければ授業は成立しない」「小学校の先生はもっと生徒指導をきちんとしておいてほしい」と反論するようなやり取りがありました。

その際、この図でそれぞれの校種の「授業」について

の捉え方の違いを説明しました。

中学校は円の内側を授業と捉え、外側を生徒指導と捉えています。それは、授業は個（教科）で、生徒指導はチーム（学校・学年）でという感覚から、分けて考えるからと思われる。一方で、小学校はこの円全部を授業と捉えます。生徒指導は授業づくりの中に含まれているのです。そして、担任が個で行っている感覚が強いと思われます。小学校の先生は生徒指導をきちんとしていないわけではもちろんないのです。ただ、今、組織的な生徒指導体制づくりについては、小学校でも必要性を強く感じているようです。

それぞれが認め合うためにはお互いを知ることが大切であり、そして連携につながっていくと思います。



この「基礎的条件」と「内容的条件」は表裏一体でありどちらもよくなるか、どちらもわるくなるかが一般的です。つまり、その学習集団の主体性と相互作用でその集団の状態が決まってきます。

当然、主体性があり、相互作用がある集団は学力向上につながっていきます。そのような学習集団をつくるためにどのように取り組むのがよいか考えることが、学力向上だけでなく、例えば、いじめ防止対策、不登校防止対策、キャリア教育の充実、人権教育、部活動の活性化、体罰によらない生徒指導等につながっていると思います。

このように相互作用、波及効果があるので「生徒指導総合」ということになります。

### ③ 見えないものを見る力

「授業の基礎的条件」を確立するために大切なのは、生徒が自ら「こうあるべき」という考えを引き出すことだと思います。これは、生徒を認めるチャンスを増やすことにもなります。

例えば、ゴミが落ちていたら誰かが落としたものなのかを考えます。一方、ゴミが落ちていなかったら、誰かが拾ったと考えられるかどうかが大切だと思います。「なぜゴミが落ちていないか」という問いは、ゴミを拾ったことのない者には想像できない問いであるからです。人が見ていようが見ていまいが黙々と清掃する体験を通して、想像することが可能になる問いになります。授業でも「なぜ理解できたのか、そのときの教室の状態はどうだったのか」また、いじめは、当事者はもちろん観衆・傍観者は見ようとすれば見えます。いじめがない状態は無意識的であり「なぜいじめが起きないのか」という問いは、人間関係づくりや教室の生活ルール等のよさを捉え直すことができ、意識的にルール・マナー化の約束事をつくるができると思います。生徒に「見えないもの」を見る力をつけてほしいと発信することが、生徒の成長を促す指導（開発的生徒指導）につながります。

### ④ 「価値あるメッセージの送り手」を育てる学習集団づくり

#### (1) 開発的生徒指導の重要性

「開発的生徒指導」の定義は、全ての生徒が対象で、先手的な指導ということになります。2010年に文部科学省から出された「生徒指導提要」にも、この指導の重要性が示されています。一部の生徒が対象で、先手的な「予防的生徒指導」、一部の生徒が対象で、後手的な「問題解決的生徒指導」、どれも大切なのですが、「開発的生徒指導」は毎日の授業の中で行うことが大切です。（右上の枠囲み）

#### 生徒指導提要（2010）

- 開発的生徒指導  
成長促進型、全ての生徒対象、全ての教育活動を関連づける
- 予防的生徒指導  
力を引き出す、一部の生徒対象、予測的・危機回避的
- 問題解決的生徒指導  
問題対応、再発防止

「授業の基礎的条件」における「学習の雰囲気」には肯定的な人間関係、学び合う関係づくりが、学力向上に波及効果があると考えます。その関係性の質を高めるには、まずは、「コミュニケーションは質より量である」というところから始め、授業での振り返り活動において「認め合い」の機会を必ず入れていくことが第1のステップになります。その中での双方向のコミュニケーションにおいて、学習内容の「意味面」を伝え合うだけでなく、「教えてもらってうれしかった」等の「感情面」の交流も大切になります。つまり、「あなたが大切だ」という価値あるメッセージを他者から繰り返し受け取ることが意欲を生み出し、もっと言えば、生きる力をもたらします。たった一言「ありがとう」と感謝されたり、「がんばっているね」と認めてもらったりするだけで『自己有用感』が高まっていきます。これは、極端なことを言えば、自殺のリスクを抑えることにもつながります。自殺は「自分がいなくても」という喪失感から始まることがあるからです。まずは「価値あるメッセージの送り手になれているか」という問いかけを生徒に対して常に発信することが大切だと思います。そして、そのアウトプットの場合は、一日の大半を占める授業ということになり、その積み上げの経験が、言葉によるコミュニケーション能力を鍛えることになります。

この「学習の雰囲気」づくりのポイントとして、教師が同じ空間で全員に向かって授業をする場合は、「このクラスと一緒に学ぶという空気づくり」をしているということを意識することが大切であり、その集団に対して、「このメンバーで学び合うと必ず学力が向上する」といった期待を発信することで効果につなげることができます（ピグマリオン効果）。また、生徒同士の学び合いにおいて小グループやペ

ア活動を行う場合は、「価値あるメッセージの送り手」になるという目標をもたせ、学力向上や互いの自己有用感を高めたり、役目意識を育てたりすることにも効果が期待できます。

## (2) プラスの「感情」が、「意味」を肯定し、「行動」を誘発する

「意味」と「感情」に働きかけることで、生徒たちの好ましい「行動」を強めていくことができます。特に、思春期の生徒たちは意味を作れない(意味はわかっているが…)場合があります、感情に働きかけることが意外と重要です(教師の指導は正論指導が多く、あきらめ的に従う場合があります、生徒は好ましい行動を積極的にしていく感じになりにくい)。これは、先に述べた「このクラスで一緒に学ぶという空気づくり」に波及し、学力向上につながります。その「空気づくり」の一環として学力向上を目標とした集団づくりの取組を行っています。これは学力向上に働くテクニカル的な指導ではなく、特に感情に働きかけ、意味を理解したり、行動を積極的にしたりするための授業です。

一つ例をあげると、「ライフボート」という授業を年度当初にしていました。やはり、初頭効果は記憶に強く残ります。これは、新聞紙1枚を広げ、それを船に見立て、乗れそうもない人数で乗るといったものです。生徒たちは工夫しながら、できるだけ大人数で乗ろうとしがみついたり、おんぶをしたりします(肩車は危険なので禁止)。信頼関係を高めるのはやはりリスクシッピングが一番効果的です。また、異学年で交流して行ったりするときは、身体の大きい上級生のほうが多く乗れたといった状況もできます。これは、信頼関係のなせることだと目指す生徒像に結びつけ、下級生は上級生への憧れをもつことにもなります。この年度初めの安心感体験は、その後の授業での話し合い活動等にも波及効果があり、学力向上につながります。このようないわゆるエンカウンター的な活動を教科の授業での好ましい行動に結びつけていくことが大切だと考えます。

## ⑤ アクティブ・ラーニングの質を高めるために

授業は生徒指導の弱点でもあり、また最大のチャンス

でもあると思います。教科指導から学級の荒れが始まり、逆に、教科指導を通して学級づくりが大きく前進します。1日の大半を占める授業において、ルールや人間関係をつくるのが最も効果的であり、学力向上だけでない波及効果が得られます。そこで、いくつか授業の質を高めるためのポイントを示します。

### (1) 「学習の勢い」は、維持ルールと向上ルールをコーチングで契約

「学習の勢い」は、学習規律と教室環境を整えることが大切です。

まず、学習規律についてですが、維持ルールの確立が必要です。維持ルールとは、集団でお互い気持ちよく生活するための必要なルール・マナーのことです。ただ、維持ルールの定着だけでだらだらと取り組むことは危険です。集団は必ず退行していきます。そこで大切なのは、よりよい集団になるために工夫・改善していくことです。この刺激がないと生徒は考えない集団になったり、一部の生徒が都合よく楽しむ集団になったりしていきます。こうならないために、向上ルールを考えさせて実行させ、振り返らせ、また考えさせることが大切です。その際、私は『「べき」のすり合わせ』というやり方で生徒たちと契約を結びます。「この教室でみんなが学ぶ、学びあうためにはどうあるべきか?」という問いをまず、個の考えをつくりそれを小集団でまとめ、全体で共有する。教科の問題解決的な学習においても同じようなプロセスでやるので、全教育活動での筋の通った実践になります。大切なのはみんなでつくった契約なので、違反したら私は、思い切り怒ることができ、そして遵守していたら思い切りほめ、認められ感を高めていくことができます。このルール違反と遵守は同じように2本のアンテナでしっかりキャッチしていくことが大切です。違反だけ反応していませんか。遵守をほめ、認めると教室のルールが強化されていきます。

次に、教室環境についてですが、私はサッカー部を長年指導してきましたが、例えばでこぼこで石があるよう

な狭いグラウンドでサッカーをがんばれという状況を体験させたり、考えさせたりしてみます。この状況で意欲的に取り組むことはなかなかできません。ところが、広い芝のラインの入ったグラウンドに連れて行くと、がんばれと言わなくても勝手に意欲的に取り組むものです。だから野球部はグラウンド整備をするし、剣道部は道場をきれいにするのです。つまり、環境は大きく意欲と関連します。ということは、教室環境は学力向上につながると認識させることができます。このように開発的生徒指導は、部活動の活性化と学力向上を総合的に捉えることができます。

## (2)「学習の雰囲気」は、振り返り活動の充実

毎時間の授業、学校行事等、振り返り活動はとても大切な生徒指導です。まずは、コミュニケーションは質より量ということでいいと思います。例えば、授業の最後に振り返り活動を行ったとします。その際、「この解き方がわかるようになった」という意味面の振り返りを私たちは期待するところですが、「〇〇君に教えてもらってうれしかった」という感情面の振り返りも大事にしたいと考えています。継続していくと感情面しか言えなかった生徒が「〇〇君から教えてもらって、解き方の途中でわかった」といった意味面と感情面を統合した発言を聞くことができます。意味面だけを発言していた生徒も、教えていた立場だったとしても相手に対しての感謝を言うようになります。このように、意味面と感情面を統合した表現が学校で行うコミュニケーションであり、そのことを全教育活動において指導していくことが重要です。すると小さな自信が生まれ「私たちはやれるかも」という感覚になり、それが身近なまわりの人からほめられたりすると「私たちにもやれる」という感覚になり、なんらかの結果が出て、このメンバーはすごいと言われたりすると「私たちはやれる」とチームとしての効力感が高まっていきます。

## (3) 授業デザインの工夫

- ①「理解しよう」だけでなく、「説明しよう」といった発問
- ②ALで取り組むテーマに関する十分な予備知識
- ③スタートからゴールまでの道筋を十分に示す

④グループ学習をすればいいのではなく、生徒自身が「問い」をもつ

大まかに言うと「基準を示す」→「思考を放棄・停止させない」→「チャレンジさせる」ということです。

ALの実践は、今に始まったことではないのです。そして、総学、特活、道德の優れた実践にヒントが隠されているので、教科を超えて学ぶことは教師の生徒指導力を高めることにつながります。

## ⑥「開発的生徒指導」の視点に立った授業づくり

「開発的生徒指導」は、生徒の主体的な成長を促す指導であり、全ての生徒が対象で先行的に行うことから日常の授業が必然的に大きな役割を占めます。となると、日常の授業は、ラーニングピラミッドを意識したアクティブ・ラーニング型授業を行うことが波及効果を生みやすくなります。つまり、教室の人間関係や集団づくりができていないとピア・ラーニング（仲間との学習、何人一組でもよい）が成り立ちません。このピア・ラーニングを取り入れた授業形態はペア、グループ等が考えられます。そこでのアウトプットする場が生徒のインプットを強める効果につながっていきます。また、アウトプットがインプットを強めることから、ルーティン化させた振り返り活動も学習効果や主体性の育成につながっていきます。

ただ、このような開発的生徒指導においても、やはり、背景には、ある意味教師は怖くなければならないと思います。強制性が背景に必要ということです。もちろん強制性は生徒にとっては嫌なことであり、主体性の育成の弊害になるという考えもあります。だから、余計に教師の思いを伝える力であったり、教師の言葉の力であったり、それだけでなくその教師から表出するものすべてが、伝える力、言葉の力の共通項として必要になります。そのための3つのポイントは…

### (1) 意味を語る

教師の思いを伝える力が必要であり、それは言葉だけでなく表出するものすべての共通項で伝わるため、教

師のエンターテインメント性の向上は不可欠になります。

## (2) 一貫性をもつ

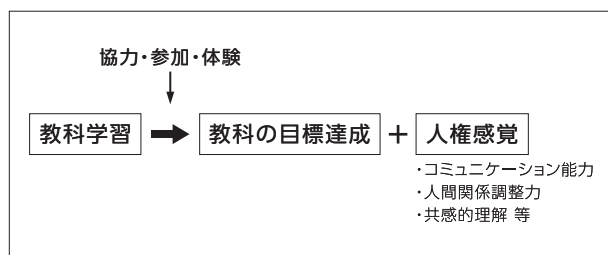
はぐらかしたら不信感が生まれます。生徒が最も嫌うのは正面から向き合わないことです。また、一貫性が感じられなければ、(1)のやらされる意味がわかりにくくなってきます。だから、総学、特活、道德の実践と教科の授業展開を関連付けると全教育活動を通してることになり一貫性が生まれます。

## (3) 結果的充実感をもたせる

結果にこだわることは大切です。結果が出ると「強制性」が「信頼」に変わっていきます。生徒が取り組んでよかったと思うことが、意欲を向上させ、以後自ら取り組む主体性につながっていきます。逆に、結果が実感できないと不信感が生まれることもあるので、まずは、その因果関係を短い時間で体験させることも必要になります。

この3つのポイントは、教科指導においても、学習に対する目的意識や学習意欲を向上させることにつながると思います。

## ⑦ 「人権教育」「キャリア教育」の視点に立った授業づくり



人権教育の3つのキーワードに「協力、参加、体験」という言葉があります。ここで言いたいのは、〇〇教育というものは、すべてねらいが共有できるということです。この3つのキーワードも、学習過程に組み込み、教科の目標と同時に人権感覚を育成する意識につながります。「協力、参加、体験」は、まさにALでの学習過程に重なり合うもので、また、人権感覚は、「感覚」つまり日常化しなくては獲得できないものであり、それを可能にするのは

毎日の大半を占める教科の授業でなければありえないということになります。

よく聞く話で「キャリア教育より学力向上させることが重要ではないですか」とか「生徒指導が忙しくてキャリア教育を実施する余裕がありません」などを耳にします。その関連づけができない考え方に危惧することがあります。多忙感を感じ、意欲的にならないからです。

しかし、キャリア教育もねらいは共有できます。というのもねらいは「社会性の育成、学習に対する目的意識や学習意欲を向上させる」からです。

よく考えるとキャリア教育は、学力向上に対して波及効果が高いといえます。発達段階から考えると学ぶ意欲を高めるためには中高生年代は、目標をもつことが重要だといえます。

自ら学ぶ意欲	
好奇心	「学ぶことがおもしろい(内発的)」 ・幼児期前期(2～4歳): 拡散的好奇心(安全確保) ・幼児期後期(4～6歳): 特殊的好奇心(刺激・共感)
成長欲求	「過去の自分より成長したい」
優越欲求	「友達に勝ちたい」 ・小学生
自己実現	「将来の目標を定め、そのために学ぶ」 (自己理解を促す、目標の実現のために必要なことは、たとえ嫌なことでも自発的に学べるようになる)

結果、キャリア教育の充実と学力向上とはもちろん対立するものではなく、つまり、上に書いたように、学ぶ意欲の発達段階から考えると、キャリア教育を実践することにより、学習意欲を向上させることができれば、学力向上につながるといえます。

また、「生徒指導」の実態から考えると、問題行動を起こした生徒が、よりよい行動を選択したり、自分の行動に責任をもつように指導したりすることは、自己指導能力の育成をしているといえます。これは、キャリア教育における基礎的・汎用的能力の育成と同じであり、つまり、日常の生徒指導の忙しさは、生徒指導をしながら、キャリア教育

を充実させていることと考えることが大切だと思います。

ついでにいうと、道徳教育も同様です。ALを取り入れた道徳授業は、「読む道徳」から「考え議論する道徳」への変化にもつながるからです。

## ⑧ 私が授業改善で意識していたこと

長年実践する中で、テストのスコアはまあまあ上がっていました。また、さまざまな活動や生徒指導の波及効果もありました。ただ、すべてがアクティブかといえばそうではなかったし、それよりも連続性、総合性が大切だと考えていました。方法は多様でも、目標の一体感を各教科担当、各部活動顧問、各分掌担当と共有できるかがポイントだと考えていました。例えば、授業を含めた全教育活動において、「個人→グループ→全体→個人」の流れの中で、「助けてもらう力」の意義を肯定的に捉えられるようによく話していました。「助けてもらう力」とは、人を好きになる秘訣でもあります。つまり、助けてもらうとその人に感謝し、今度はその人のために何か役に立ちたいと思うからです。助けてもらう力をどんどん発揮すれば、そこにいる人たちの人間関係はどんどん向上していくのです。「助けてもらう力」は、実は教師に当てはまることが多く、そもそも教師は「助けて」「できない」「わからない」を言うと専門家として恥ずかしいと考えたりします。つまり、ALのキーワードでもある「協働」ができていないことが多いのです。結局、生徒指導においてもこの「協働」ができないことが問題を難しくしていたりします。すべてを関連づけて考えることがALをする意義になるのです。

ALの3つの柱を関連づけて意識していくことで、学校教育活動全体に波及効果があるのです。そして、教師の同僚性も高まっていくのです。

## ⑨ 教師は「ジェネラリスト」であれ

最後に、ALで思うことは、やはり「人は人で磨かれる」ということでしょうか。関係性の質が高まると、思考の質

が高まり、行動が積極的になり、結果が得られるというプロセスは、何らかの集団的な活動を経験した人なら誰もが実感として持っていると思います。

関係性の質を高めると一言と言ってもそうたやすいことではありません。つまり、教師とは、教科の専門性といわれる力だけでなく、「異質をつなぐ力」が教師の総合力（ジェネラリスト）として求められる力になると考えます。

「異質」…例えば、学校と社会、教室と家庭、学校と学校、そして教師と生徒、生徒同士…この異質なものの境界に新しい活力の源がある。この異質をつなぐためには、心理的な壁を越えて近づかななくてはなりません。新しい世界、新しい出会いを生徒が自ら求める意欲をもたせなければならないのです。

実は、教師と教師をつなぐことが一番重要なことだと思います。そのために学び合う学校文化づくりが必要になります。教師の質の多様化を逆手に取り、それぞれのよさを生かし合うことで学校全体の教育力を高めることができます。その際、気をつけるべきことがあります。教師としての経験や能力が異なっても、一人一人の教師は教育のプロフェッショナルと見られます。だから、まず、互いを知り、認め合うことから始め、教師同士は「教え、教えられる」という縦の関係ではなく、「盗む、盗まれる」という斜の関係を築かなければならないのです。つまり、主体性が重視されるのです。

そのために私たち教師は、「教育者」として必要な人間性と幅広い視野をもつために学び続けることが大切です。教室で提示できるのは教科の知識ばかりではありません。生徒たちの「窓」になり、多くの「風景」を見せ、「異質をつなぐ力」を発揮しなければならないのです。そのために教師は、あまり自分がスペシャリストであると思ひ込まず、ジェネラリストであることを考えてほしいと思います。

そして、私たちは、生徒たちの「大きな窓」にならないと思います。